

シ	ン	パ	シ	ー	と	エ	ン	パ	シ	ー									
新版K式発達検査をめぐって											その②9								
											大谷 多加志								

今回は、前号の「大人目線と子ども目線」の続きというか発展版として書いてみようと思います。このように考えたのは、短信にも書いた「ぼくはイエローで、ホワイトで、ちょっとブルー」（プレイディみかこ著）を読んだことがきっかけです。この本の中で、「シンパシーとエンパシー」について語られている部分があり、それが前号の「大人目線と子ども目線」について、また違う観点から考える切り口になるのではと思い、今回のテーマに取り上げることにしました。

■ 他人の靴を履いてみる

前述の本の中で述べられているのですが、相手の立場に立つことを意味する言葉として、英語では“Put myself in your shoes”（他人の靴を履く）という言い方があるそうです。この言葉が「相手の立場に立つ」という意味で用いられていること、またいわゆる「共感＝シンパシー」とは異なる、「エンパシー」を示すものとして用いられていることが非常に面白いと思いました。

シンパシーというのは、私たちが他者に対して“自然に”感じる同情や共感のことを示すのに対して、エンパシーは相手の立場を想像することで他者の感情や経験について理解する「能力」とであるとされているそうです。このことが、前号で述べた大人にとっ

ての「子ども目線」になることの難しさと通じるように思ったのです。つまり、自然には感情移入できない相手の立場を、それでも想像し理解しようとする能力を求められるということです。

「子ども目線」で考えることの難しさは、単に「子ども目線」で考える意識を持てばよいというだけでなく、「大人の見方」を外す必要があることから生じています。他人の靴を履く、という言葉に関連した表現に“*You can't really know a man until you walk a mile in his shoes*”（彼の靴を履いて1マイル歩いてみるまで、相手を理解することはできない）があります。一定の批判はありながらも、障害の疑似体験プログラムが一定の評価を得て、続けられているのは、他者の靴を履いてまず歩いてみる、という一歩を踏み出す機会になっているからなのかもしれません。

■ 子どもの世界

そして、子どもの世界を想像するのが難しいのは、この疑似体験が難しい点にあるのかもしれません。子どもの目や耳には私たちと同じような情報が届いています。例えば、同じ場で過ごしている時、大人と子どもとで目に見えたり耳に聞こえたりする刺激自体には大きな差はないでしょう。しかし、

その捉え方(認識の仕方)が、思いがけないほど違うのです。

「ことば」を例にして考えてみます。私たち大人は既にたくさんの語彙を獲得しており、平均するとおよそ40,000語程度の理解語彙があるとされています。日常生活においては、身の回りにある物はほぼ理解語彙(名称がわかる)に含まれていると考えてよいでしょう。また、私たちは意識的な思考は、ほとんどの場合、言語的に行います。例えば、頭の中で『今日の夕飯は何にしようかな…?』と考えるような感じです。身近な物の名称がわかり、言語で思考できることは大人にとっての「当たり前」ですから、“それがわからない状態”は自然には想像しにくいかもしれません。

以前、岐阜県にある多文化共生センターで聞いて印象に残っている話があります。日本に来て最初に行う日本語教育プログラムの中では、使用頻度が高い他者とのやりとりの言葉とともに、身の回りにある物の名称をまず学ぶそうです。たとえば就学する年齢の子どもであれば、家庭にあるものに加えて、学校にある物の名称(黒板、靴箱、給食室…など)を学ぶということです。身近なものの名称がわかることは、自分の今いる場所を理解し、他者とコミュニケーションをとる上での重要な土台となっていることを示す一例と言えるでしょう。

また、言葉を用いなくても、私たちは身の回りにあるものの意味や扱い方がおおよそわかります。たとえばドライバーには、持ち手が長い筒状のものもあれば、丸いもの、握り込む形状のものなど、さまざまなものがありますが、多少形状が違ってそれをドライバーだと認識できます。また、工具箱に

入っているとか、その物が置かれていた場所によって、その物が何であるか、おおよその予測が可能です。このように物や環境が生き物に対して与える意味のことを「アフォーダンス」と言います。たとえばコップの取手は、“そこを持つように”という意味を私たちに示してくるわけです。

ただ、赤ちゃんはそのような物の特性にアフォードされなかったり、予測をしたりしないわけです。コップを見せてもそれをわしづかみにして、あたかも積木か何かのように机に打ちつけたり、放り投げたり、取手部分を口に含んだりします。つまり、“コップ”や“取手”という意味が赤ちゃんには認識されないということです。

さまざまな物の用途に応じた扱い方をすることを「慣用操作」と言います。慣用操作とは、鉛筆であれば書く、スプーンであれば口に運ぶ、積木であれば積む、というようにその物の特性に応じた操作をすることで、身近な物については平均的には1歳前後で可能になるとされています。

ここまで述べてきたことを要約すると、大人は言語的な知識や言語による思考の力、さらには慣用操作に代表されるような非言語的な認識の力を身につけていると言えます。奈良女子大学名誉教授の浜田寿美男先生は、このような大人の世界を「意味に満たされた世界」と呼んでいました。言語的にも、認知的にも、意味がないものを見つけるのが困難であるほど、なにごとにも“勝手に”意味を見出してしまうのが大人の認識で、それが“まだ何のものにも意味を見出していない”子どもの世界とずれてしまうのです。子どもと大人の認識の違いについて、表1にまとめました。

表1 大人と子供の認識の違い

	認知的意味 (アフォーダンス)	言語的意味	認識の中心的手段
大人の認識	影響 大	有	言語
子どもの認識	影響 無~小	無~小	感覚

大人が「意味的世界」の影響を大きく受けているのに対して、子どもは「意味」の影響が相対的に小さいです。また、認識の手段も言語ではなく感覚が中心です。つまり、まだ意味を見出していないもの（無意味）に対して感覚で知ろうと働きかける（手を伸ばしたり、口に運んだり…）ということです。その時に、子どもの中ではどんな感情が生じたり、その状況をどのように経験したりしているのか…、想像が膨らみます。

■ シンパシーとエンパシー

では、このような認識の差異を乗り越えて、子どもの世界に迫るためにはどのような手段があるのでしょうか。実はこの手段についてはとくに定説があるわけでもなく、私自身も答えを持っているわけではありません。ただ、結果的に子どもの世界に迫ることができる力を身につけられるとしたら、それは最初に述べた「エンパシー」の力を養った結果として得られるものなのではないか、と思っています。自分たちとは状況も文化も常識も違う他者の立場に立ち、他者が感じるであろう感情や認識を想像し、理解しようと努めることは、子どもの世界を理解する力を養うことにも通じると思います。

先述の浜田先生は、私の勤務先の研修において子どもの認識世界を想像することについて、次のような表現をしておられまし

た。『私たちが持ってしまっている発達観、人間観をまずはゼロにまで還元する努力をすることで…』。つまり、私たちの既存の知識や認識を、意識的にいったん捨ててしまうということです。

対人援助職者は、援助の現場では相手を受容し、理解して関わることを心がけます。ただ、その時にも援助者が“自然に”想像できる形で相手の内面を考えてしまいがちです。たとえば、

「クラスの活動に入れていないのなら、悲しい気持ちになっているだろう…」

「先生や親に怒られてばかりなら、自信を失っているかもしれない…」

などです。

ただ、これは一般論や思い込みである場合もあり、集団に入れていなくても、大人に怒られても結構へっちゃら、という子どももいます。結局、個々の子どもについて、よく観察することから始めるしかありません。

バイスティックが述べたソーシャルワークの7原則の一つに「非審判的態度」があります。これは対象者の行動や考えについて、援助者の価値観や正義感による判断を持ち込まないように意識的にコントロールすることを指します。子どもの言動に対する「非審判的態度」が、子どもの認識世界を捉え、発達理解をしていく上でも手がかりになるかもしれません。